

「8月9日、長崎」(2020.8.16)

平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。(マタイ 5:9)

先週の日曜日は8月9日だった。説教壇に立ちながら、11年前のことを思い出した。東神大3年に編入学し、4年になった次の年の夏休み、神学生には「夏季伝道実習」があり、私は九州の長崎古町教会に遣わされていた。1か月の間、いろいろな奉仕・研修・交わりがあるのだが、説教は一回課せられていた。F牧師から何回か説教原稿を校正してもらい、本番に臨んだ。ところが、その日がなんと8月9日だったのである。この日の11時2分、原爆が浦上天主堂上空に投下され、多くの尊い命が失われたのである。それで、説教は11時1分に終えて、会衆とともに黙祷するよう指示されていた。説教を正確に終わられるよう練習し、本番でも時間をチェックしながら予定通り終え、黙祷を合わせたのである。街中が長崎の鐘に合わせて重く切ない祈りに満たされていた。

ある日、一人で浦上天主堂を訪ねた。シスターが一人いて、応対してくれた。私は自分の素性を話し、こんな質問をした。「長崎の人って、昔たくさんの方が殉教し、そのうえ、原爆でたくさんの方が亡くなっている。それなのになぜ、なおも信仰を持ち続けることができるのでしょうか？」すると、会堂の横に掲げられている「被爆したマリア像」を示し、ぽつりと「マリア様も一緒に被爆されたのです。」そのように言ったのである。自分一人が苦しんでいるのではない！マリア様も一緒に苦しんでいて下さる！・・・長崎のカトリックの信仰に触れた気がした。お礼を述べて外に出ると、何か深い慰めが体中を包み、力が湧いてくる気がした。私たちと苦しみを共にして下さっているイエス様がそばにいて下さる！そんな信仰が沸き起こってきたのである。



8月9日。秋田や東北は祭りでにぎやかな頃だ。しかし、長崎は平和の祈りに満たされている。7万4千人が亡くなり、今なお多くの方が被爆で苦しんでいる。原爆の前には正義も勝者もない。原爆の悲惨さを味わった私たちの先達は、戦争を放棄し絶対非戦を誓い、平和憲法を掲げたのだ。ここに込められている悲壮な決意を忘れず、この原点に立ち返り、私たちは祈りたい、私たちの国の指導者たちが、唯一の被爆国として、国際社会において平和をリードするように。私たちが平和の道具となるように。